

平成28年度

発達障害支援スーパーバイザー養成研修：報告書（臨床実習）

氏名	木村 裕子 ^①	研修日	平成28年10月25日
所属	NPO法人 子育て支援グループ ひまわりのお家		
臨床実習機関	平成28年10月24日～平成28年10月28日		
臨床実習内容 (2日目)	AM 9:15～PM12:00 作業支援 デイサービス ローソク製作班		
	PM13:00～PM16:00 作業支援 デイサービス 手工芸製作班		
[考察]			
<p>午前中は、約8名の利用者と常勤1名、非常勤1名で作業(ローソク作り)に入る。全体的に落ち着いた雰囲気に着席し各自、得意な課題を自分で選択し色の分別作業を行う。選択が困難な方には、本人の出来るところから行えるよう職員が準備し渡すと作業に入ることが出来る。</p> <p>音に過敏な利用者はヘッドホンを装着し、女性の甲高い声が苦手な事がダイレクトに聞こえないよう配慮されていた。部屋も個室で作業に取り組めるようにしている。途中、休憩をはさみ水分補給後、運動プログラムを行う。ストレッチの手順もよく把握し職員の掛け声と同時に利用者も声を出しながら行う。ウォーキングは、約20分間行う。昼食を全員楽しみにしながら待つ。</p> <p>指導員の言葉かけが、丁寧で優しい雰囲気であった。利用開始当初、パニックを起こす利用者が多くいたようだが日々通いながら生活リズムも安定し落ち着いて作業に取り組めるようになったようである。</p> <p>午後は、隣の部屋の手工芸班に入る。9人の利用者と常勤1人での対応であった。非常勤職員が休みのため時々、補助職員が来て対応していた。職員1人ではあったが、利用者が落ちついているので雰囲気も和やかで、職員が大変・・・という印象がない。スケジュールに拘る利用者には、自分でスケジュールを作成してもらいながらスケジュール通りに作業活動を行えるよう配慮していた。その通りに行うので本人の安心感から責任感と使命感により全うでき、評価され、満足感を得られていた。もくもくとスウェーデン刺繍を行う方は、何枚も仕上げていた。作業困難な方には、型はめも用意していた。</p> <p>個々の得意な課題を用意し、それぞれの達成感が得られる配慮と利用者が出れることは任せているとのことで、自分は役に立つ存在である実感を得られて生活していた。これが大切な事であると感じた。</p>			

平成28年度

発達障害支援スーパーバイザー養成研修：報告書（臨床実習）

氏名	木村 裕子 ^④	研修日	平成28年10月26日
所属	NPO法人 子育て支援グループ ひまわりのお家		
臨床実習機関	平成28年10月24日～平成28年10月28日		
臨床実習内容 (3日目)	PM13:00～PM16:00 入所施設 こまちグループ運動		

〔考察〕

9人の女性入所者と1名の常勤で静かにTVを見ていた。運動の準備に入ると、速やかにTVをオフにする。年齢は20代～40代。会話が出来る方から出来ない方それぞれの存在を認識し合いながら、面倒見のよい方がサポートしていた。運動着に着替える時、排泄時の支援は職員が対応。自立している方は、淡々と着替え準備する。

癲癇発作が頻繁な方は、職員が丁寧に様子を観察していた。話をしすぎると感情が高ぶり発作を起こすなど、楽しんで会話していてもテンションがたかぶらないよう配慮する。

運動開始で、40分間フロアでウォーキング(サザンの曲を流す)を行う。
その後水分補給し、踏み台昇降を30回。高さが50センチほどあるのでかなりしんどいが全員行う。

うさぎ跳び・ほふく前進・後ろほふく前進・等次々を行う。

途中で行わない方も出るが、強制はしない。

約1時間半の運動プログラムだが、全員行い達成感を得ていた。

また利用者全員、スリムである。

その後、着替えて各部屋のベッドメイキングをする。出来る方が出来ない方の手伝いをする。入浴を楽しみにしている方、ほぼ準備等を終わると、間のある時間で不安になる方、その方の不安な話を隣でじっと聞いて頷く方もいて、お互いに安心感を得ている様子である。

職員はほとんど、口だしすることなく利用者が困っている時、発作状況の確認、準備などの時に対応するスタンスである。利用者も職員のスタンスに安心感を持っているようであった

平成28年度

発達障害支援スーパーバイザー養成研修：報告書（臨床実習）

氏名	木村 裕子 ^⑩	研修日	平成28年10月27日
所属	NPO法人 子育て支援グループ ひまわりのお家		
臨床実習機関	平成28年10月24日～平成28年10月28日		
臨床実習内容 (4日目)	AM9:00～12:00 デイ 園芸班 PM13:00～PM16:00 デイ 木工班		

〔考察〕

園芸班の全員揃う時間が9時半過ぎであったので、ひとりずつ入室する様子を静かに職員は待つ。入室する利用者は控室で農作業服に着替える。8人の利用者(年齢20代～50代)に2人の職員対応である。

1人女性の利用者がいたが、気持ちが高ぶっていたため1人職員が対応する。生理中である。外にでたり散歩したりしながら気分転換をする。

園芸作業は、ブルーベリー畑の除草作業である。職員が除草し利用者がコンテナに入れ運ぶ作業。手順も理解しているのでスムーズに行う。

職員会議があり補助職員が対応するが、動揺もなく作業を行う。作業を終えて入室すると速やかに着替えて着席し静かに昼食の時間まで待つ。CDの曲はユーミン。小さい頃に親が聞いていた曲のため利用者が馴染む曲であるとのこと。

午後の木工班は、多動性の強い20代男性と強度行動障害の男性が興奮状態で職員が対応していた。利用者は、10人のうち女性2人、職員2人で対応。

全施設における避難訓練を開催。職員は利用者へ事前にどのように避難するのかを伝える。警報の音を聞き、全員所定の場所に集合。無事に全員避難できたことを確認し終了する。

鍋敷きのやすりかけ作業をおこなう。

多動の男性が時々、施設から出ようとし職員に止められる行動が繰り返される。本人の好きなパズルや組み立てキューブ等で落ち着くが集中時間が短い。強度行動障害の方はアンパンマンを好みノートに登場人物の名前を書きことで落ち着く。書き終わると、やすりかけ作業を行う。

比較的、重度な方が利用する班だが職員が動じずに静かな声で話すので、利用者も次第に落ち着いていく。職員の動きもバタバタ走ることなく素早くサッと動いて壁のように立つので利用者はくると元の位置に戻り作業活動に入る。繰り返してもあるが、職員からの否定的な言葉かけはないので、利用者が不快になることはない。否定的な言葉かけ(叱る。怒る。注意ばかりする。)が頻繁にあったとすると、このような雰囲気にはならないと感じた。